

## 地域保健管理における青年女子及び 妊婦貧血の医療と指導に関する研究

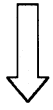
分担研究者 松山 栄吉 (関東労災病院・産婦人科)  
研究協力者 平山 宗宏 (東大医保健学科・母子保健学)  
本多 洋 (三井記念病院・産婦人科)  
伊藤 桂子 (愛知県知多保健所)  
田中 茂 (埼玉県労働保健センター)  
前田 和子 ( " )  
荒尾 静代 (東大医公衆衛生)  
阿部 昭治 (東洋信託銀行東京診療所)

現在わが国の妊婦は、医療機関においてよく管理されるようになり、貧血に関しても妊娠中に何回か検査が行われて、貧血が発見された場合には、すぐに鉄剤が投与されている。そのため、従来貧血の妊婦に見られるような妊娠中毒症、分娩時の微弱陣痛、出血多量、胎児ないし新生児仮死、低出生体重などは、現在では少なくなっている。これは、WHOの規定した妊婦貧血の限界である  $11.0\text{g/dl}$  という考え方が徹底して、それ以下の妊婦に対しては、投薬が広く行われるようになったことにほかならない。

しかし、貧血妊婦がよく管理されるようになったとしても、貧血を有する妊婦の数は減少してい

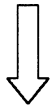
ない。妊娠中に一度でも血色素値が  $11.0\text{g/dl}$  未満になる妊婦の数は、約半数に及ぶといわれている。しかも貧血妊婦の中には、妊娠によって生じた貧血だけではなく、妊娠前から貧血を持った者が多いことが知られており、とくに若い世代の初妊婦にこの頻度が高いことが最近の問題となっている。そしてそれは若年女子の栄養の偏りに大きな問題があるものと考えられている。

このような見地から、年少女子の貧血の実態をもう一度見直すとともに、将来の妊娠・分娩・育児への過程にどのような影響をもたらすか、またどのように対処すべきか、改めて考えてみたい。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



現在わが国の妊婦は、医療機関においてよく管理されるようになり、貧血に関しても妊娠中に何回か検査が行われて、貧血が発見された場合には、すぐに鉄剤が投与されている。そのため、従来貧血の妊婦に見られるような妊娠中毒症、分娩時の微弱陣痛、出血多量、胎児ないし新生児仮死、低出生体重などは、現在では少なくなっている。これは、WHOの規定した妊婦貧血の限界である 11.0g/dl という考え方が徹底して、それ以下の妊婦に対しては、投薬が広く行われるようになったことにほかならない。

しかし、貧血妊婦がよく管理されるようになったとしても、貧血を有する妊婦の数は減少していない。妊娠中に一度でも血色素値が 11.0g/dl 未満になる妊婦の数は、約半数に及ぶといわれている。しかも貧血妊婦の中には、妊娠によって生じた貧血だけではなく、妊娠前から貧血を持った者が多いことが知られており、とくに若い世代の初妊婦にこの頻度が高いことが最近の問題となっている。そしてそれは若年女子の栄養の偏りに大きな問題があるものと考えられている。

このような見地から、年少女子の貧血の実態をもう一度見直すとともに、将来の妊娠・分娩・育児への過程にどのような影響をもたらすか、またどのように対処すべきか、改めて考えてみたい。